

平成 19 年度油ヶ淵生物モニタリング調査概要 - 底生生物調査 -

- ・ 調査時期：平成 19 年 5 月，8 月，10 月、平成 20 年 1 月（計 4 回）
- ・ 調査地点：湖内 4 地点（B1，B2，B4，B5 図 1 参照）
- ・ 結果

底生生物の調査では、平成 17 年度、18 年度と同様に、比較的汚濁に強い種類とされるイトミミズ類、ゴカイ類、ユスリカ類が多く採集されたが、ゴカイ類は春季以降減少し、秋季には全ての調査地点で採集されなかった。ゴカイ類は基本的に海産生物であることから、湖内への海水の流入状況が変化したことが考えられる。なお、冬季には B2 において再び採集された。また、冬季には特定外来生物に指定されているカワヒバリガイが初めて B5 を除く各地点で採集された。

平成 17 年度～19 年度に湖内で確認された底生生物の種類数、個体数は図 2 に示すとおりであり、各地点とも季節ごと、調査地点ごとに変動しているが、種類数については、B4 において平成 19 年度の夏季以降増加傾向がみられる。また、個体数については、水深の深い湖心部の B1、B4 は、湖岸側の B2、B5 に比べて個体数が少ない傾向がみられる。

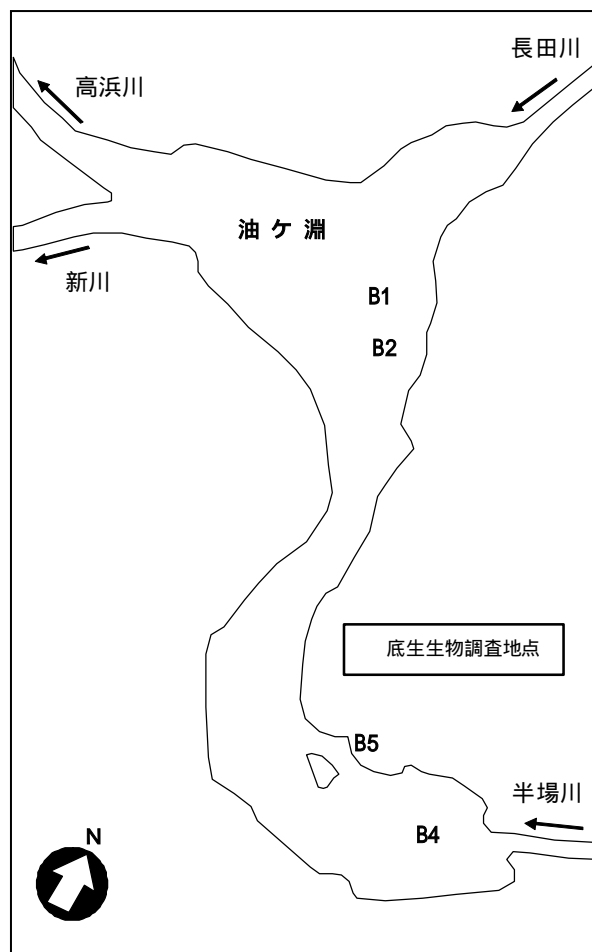


図 1 底生生物調査地点位置

底生生物の生息にとって重要な要因である底層の溶存酸素量（D0）をみると、B1、B2 及び B5 では D0 がおおむね 3mg/L（清流ルネッサンスの目標値）以上で推移しており、一方、他の地点に比べて水深の深い B4 では 3mg/L を下回ることが多い（図 3 参照）。B4 は他の地点に比べて底生生物の個体数が少ないが、これは D0 が少ないことが要因の一つと考えられる。

平成 17 年度以降の底生生物の出現状況については、イトミミズ類やユスリカ類など比較的汚濁耐性の強い種類が主に出現している状況に変化はみられないが、平成 19 年度は、ゴカイ類の減少や B4 における種類数の増加など、一部で変化がみられた。また、特定外

来生物に指定されているカワヒバリガイが平成 19 年度に出現しており、今後の出現状況に注意していくことが必要である。



環形動物門 イトゴカイ科
ノトマストゥス属



環形動物門 イトミミズ科
ユリミミズ属



節足動物門 ユスリカ科
カコスリカ属

平成 17 年度撮影

写真 1 油ヶ淵における主な底生生物

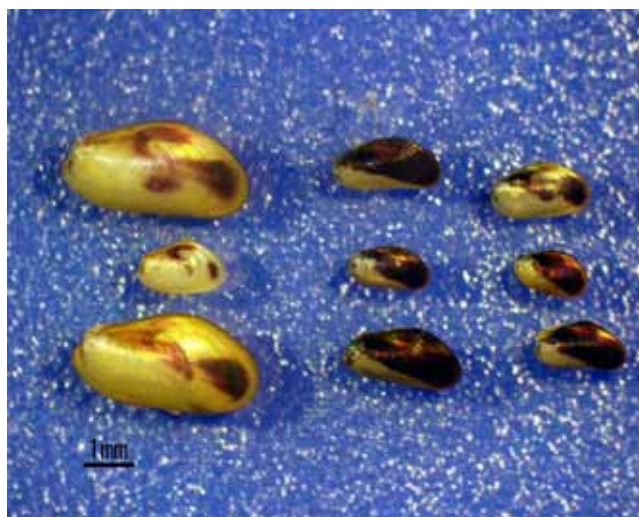


写真 2 採取されたカワヒバリガイ

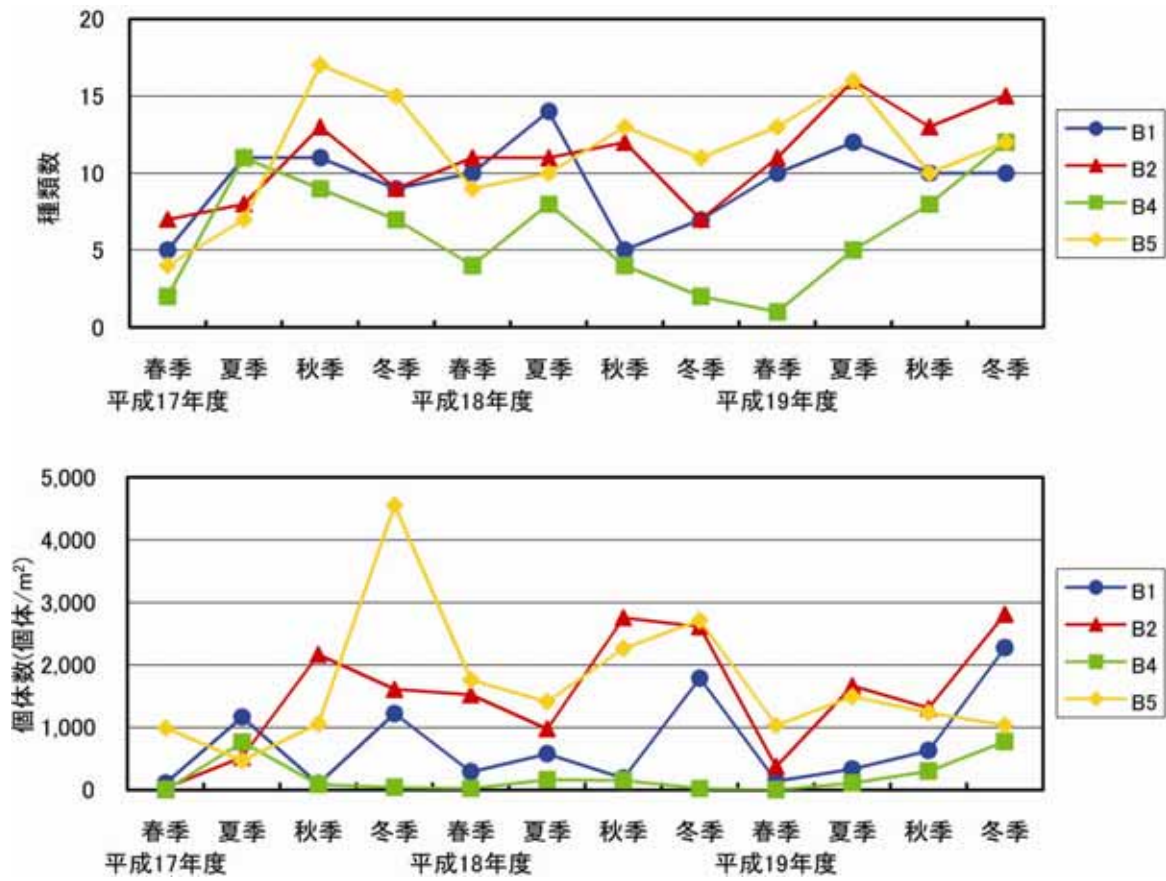
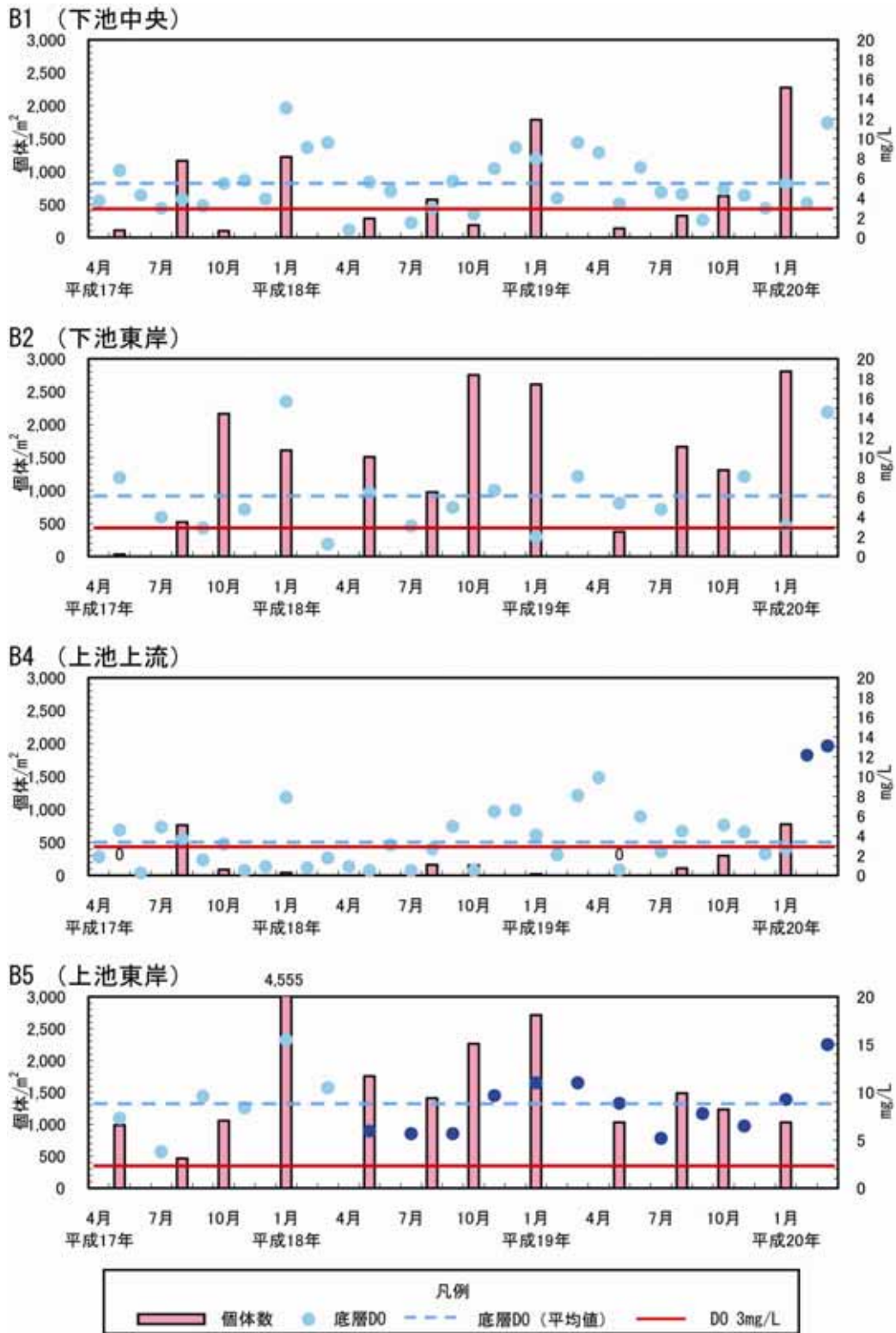


図2 底生生物の調査地点別の出現状況



注 1) B5 (上池東側) は平成 18 年度から表層 DO の観測のみであるため、また、B4 (上池上流) の平成 20 年 2 月及び 3 月は覆砂作業が行われており通常より水深の浅い地点で観測したため、参考値として、色 () を変えて表示した。

注 2) 上池の上流側では平成 19 年 1 月中旬から 3 月末まで覆砂作業が行われていたため、B4 における平成 19 年 2 月、3 月及び 4 月の水質調査は、通常より下流側の地点で調査を行った。

図 3 各調査地点の個体数と底層の DO の状況